

に依つて近世の百落荘の棟数や、食費支給の賦役が明らかにされたのは重要なことである。

中世後期農村の経済的構造と その変遷

相模国柳川郷を対象としたもので、昭和十八年の成稿である。柳川郷には永正四年、慶長十六年、寛永十七年の検地帳が保存されているのを利用して、嘗つて乙木荘の研究に用いたのと同様な研究法に依り、百二十年以上に亘る長い期間に亘る柳川郷の経済的構造の變化を明らかにした。村民一戸毎にその保有する田畠屋敷の面積を計出し、それを基にし、統計的数字を基礎にした所論が大きな説得力を持つたのは当然で、敗戦後頓に盛んとなつた検地帳の研究はこの刺激に因つたものと云うことができるだろう。以上粗雑な紹介で著者に対して誠に申訳ないが、今後荘園研究に志ざすものに取つてはこの書が必ず読まなければならぬ書であることは推察して頂けるとかと思ひ、紹介の筆を執つた次第である。

〔岩波書店発行、定価一、八〇〇円〕

——赤松俊秀——

V. K. Yatsunsky : Pronysh-
lenny Perevorot v Rossii

(Voprosy Istorii, 1952, No. 12, ss.
48—70)

最近におけるイギリス産業革命の研究は、トインビー的「断続」説を修正し、それが数世紀にわたる着々とした進歩の結果であり、何ら「革命」的なものではなく、「連続」的なものであるとしている。小松芳喬教授は『英国産業革命史』において、「連続」説を支持されながらも、なお「十八世紀後半以降の英国の経済的発展の速度が全般的に見て著しく増大し、特に工業の飛躍的発達を、農業を『国民生活の主流ではなく、その淀み』にしたこととは、疑いのない事実であり、そこに産業革命と名付けても適當な変化が見られたのである」としておられる。(三〇四頁)しかし産業革命を資本主義成立の立場からみてゆくと、単に技術的変革や、経済構成の變化にとどまらず、社会の質的變化を呼びおこしたこの一つの大きな動きを、農業中心へというような純経済的な観点から分析してゆ

くことが適當であるだろうか。

このような立場に立つとき「後進国ロシアにおつては、資本主義が工業を建設する前に、換言すれば産業革命を完遂する前にツァーリズムと心中してしまつた。……第一次五ヶ年計画は実に産業革命の国家権力を以てする促進であつた。」(猪木正道『ロシア革命史』二六五、二七〇頁)というような見解が生れる。或は又「ロシアの産業革命は一八九〇年代から一つの特徴ある発展段階に入つてゐる。それ以前においても、一八四〇年代以降、繊維工業部門のごときものにおいて機械生産が散発的な形であらわれている事實はあるが、一八七・八〇年の頃までは、なお家内工業の勢力が圧倒的に大である。」(鈴木成高『産業革命』一五七頁)とし、「ロシアは資本主義的産業革命につまつたのちにおいて、社会主義計画経済のもとに、その産業革命を驚異的な速度と規模とにおいて強行した。」(同上三頁)というような説が生れてくる。

ロシアにおいてははたして産業革命が行なわれなかつたのであろうか、或は行なわれた

としても一八六一年の農奴解放以後、十九世紀の末期になつてはじめて開始されたのであろうか。従来我国におけるロシア史の研究は未開拓のまま放置せられ、このような説が、事實の具体的な分析にもとずかずに行なわれて、あやしまれぬ状態である。ロシア史研究の一資料として、近著の『歴史の諸問題』誌上に発表されたヤツンスキイの論文を簡単に紹介することにする。

一

この論文は次の三つの部分からなつてゐる。

1 ソヴェト史学界におけるロシア産業革命の研究。

2 産業革命の意義。

3 ロシア産業革命の具体的な分析と結論。

ここでまず産業革命の定義に関するヤツンスキイ並にソヴェト史学界の見解からのべてゆくことにする。

彼はソヴェト史学界の慣習に従つてまず『ソ同盟共産党小史』にその根拠をもとめ、『産業革命は手工業的生産用具から機械

への移行であり、手工業的マニユファクチャー生産から機械的工場生産への転化である。』(党史一一八頁)「従つて産業革命は生産力の発展の歴史的現象である。しかし生産力の生産関係と不可分に結びついている。」(五一頁)「生産力の発展は必然的に生産関係の変化をもたらすばかりでなく、逆に生産関係は又生産力の発展に作用するのであり、産業革命は一、生産に関する技術の面と、二、生産関係に関する社会機構の面から研究されねばならないとする。(彼はこの論文の副題を「生産力と生産関係の相互作用の問題によせて」としている。)」技術面とは、手で器具を使って働く労働者の分業に基いているマニユファクチャーから、蒸気で運転され、労働者によつて操作される分業の行なわれる工場への転化である。』(五二頁)工業の技術革命と交通の技術革命は交通の技術革命をもたらし、それにともなつて金属の需要が著しく増大すると共に機械の需要の増加は新たに機械製造工業を生むにいたる。「産業革命以後は従来の消費物資の生産とならんで、ますます生産手段の生産が増大してゆく。」(五二頁)

このような機械の使用は生産過剩危機をもたらすのであるが、社会機構の面としては農民の土地からの離脱と工業プロレタリアの形成、プロレタリア運動の発生をあげ、更に「マニユファクチャー時代には支配階級はなお貴族であり、ブルジョアジーの間では商人ブルジョアジーが第一位であつた。産業革命は産業ブルジョアジーの形成を促進し、その蓄積の増大をうながし、ブルジョアジーの第一人者たらしめたのであるが、特に重大なことは国内におけるブルジョアジーの社会的役割が急激に増大したことである。」(五四頁)としている。

彼は研究上の注意として次の点をあげてゐる。

1 ソヴェトの史家は生産関係の発達の研究にのみ熱心で、生産力の発達をおろそかにしている。

2 技術革命の進行は不均等である。「従つてはじめは工業の各部分の研究を、ついで全体としてそれが国民経済の発展におよぼした影響を、さらに国内にもたらした社会的変革の分析に移らねばならな

い。】(五五頁)

3 生産の変化と発展は『常に生産力の変化と発展から、まず第一に生産用具の変化と発展からはじまる。』(党史一一七頁)

「ここから、産業革命の開始は機械の普及からはじまるとすることが出来る。…開始とは各々の部門において、一つではなく、多くの工場が新しい資本主義的技術を組織的に採用することであるとみなしうる。又完了とは、ある部門において、新しい技術が古い技術を第二義的なものにおいやり、それに相応する社会秩序の変革をもたらした時期であるといえる。」(五五頁)

4 一国における産業革命の完成とは、主要な生産部門において、大工場が当該部門生産物の大部分を生産するような時期である。

二

つぎにソヴェトにおける産業革命の研究において、まず第一にあげられるのはレーニンの『ロシアにおける資本主義の発展』である。レーニンはロシアの工業は、西ヨーロッパ

と同様、その資本主義的發展の過程において次の三段階を経過したとする。『小商品生産(少規模の、主として農民の手工業)——資本主義的マニユファクチャー——工場(大規模な機械的工業)』(レーニン全集第三卷四七五頁)レーニンはマニユファクチャーから工場への移行をロシア工業の資本主義化における重要な段階であるとしているが、しかし

「産業革命」なる言葉は用いてはいない。又研究のテーマに従つてその範圍を農奴解放後の資本主義の發達に限定している。「しかし彼が産業革命なる言葉をロシアにも適用し得ると考えていたことは明らかである。…又彼の見解としてロシアの産業革命が一八六一年の農奴解放以後にはじまるとするのは大きな誤りである。」(四九頁)

その後レーニンの見解に従つて産業革命を研究したのはズロートニコフとストルミーンである。ズロートニコフは『マニユファクチャーから工場へ』(歴史の諸問題)一九四九、一一—一二号)において、産業革命は十九世紀の三〇年代にはじまり、一八六一年の改革以後に完了したとしている。「産業革命は数

十年を要し、特に改革前は非常にそのテンポがおそかつた。」之に對し、ストルミーンは『ロシアの産業革命』(一九四四)において一七五〇—一八二〇年代のイギリスと一八一九—一八六九年代のロシアにおける棉花の輸入状況を比較し、一八六六年の手織機と機械織機、機械の輸入と国内生産の変化を考察し、『産業革命における決定的な進展期はほぼ一八三〇—一八六〇年である。農奴制の存在にもかかわらず産業革命は大規模に、急テンポで行なわれた。一八四五—一八六三年の労働生産性の上昇はこの年にそれが行なわれたことを示すものである。』(同書二一頁)と結論している。その後現れた二三の論文においても「問題の解決はまだわずかななされておらず、ただ産業革命が農奴解放前にはじまり、解放後に完了したことが確認されたにすぎない。」(五一頁)ような状況である。

ヤツンスキイはストルミーンの説に對し「彼は四〇—五〇年代のロシアの工業に行なわれた組織的進展の規模を過大評価している」と批評しているが、この論文においても「一九世紀ロシアの産業發展に関する史料を

分析し、産業革命の時代区分と、その特徴を明らかにすることを目的」としつつも「問題を提起し、その特徴を要約し、解決の爲の大略の方針」(四八頁)を与えているにすぎず、ソヴェトにおいてもロシア産業革命の研究はなお充分解決されたとはいいたくないようである。以下順を追つて具体的な分析をのべることにする。

三

ヤツンスキイがとり上げたのは「国民経済において大きな意義を持つ二つの部門——進んだ木綿工業とおくれた製鉄業」(五六頁)である。

1 木綿工業——「改革(一八六一年の農奴解放)前の工業において主要な役割を演じ、技術的に進歩していたのは木綿工業であり、ほとんど自由な賃金労働者によつて行なわれていた。(ここにいう自由とは後述する如く経営者に対する自由であつて、労働者そのものはなお農奴であり、その主人(地主)に対しては不自由であつた)この部門において技術革命が一番先に行なわれたのであるが、それは生産過程の種々な段階(紡績、織布、捺

染と仕上)において、種々なる時期に行なわれた。

木綿工業はすでに一八世紀において、輸入キヤラクの捺染からはじまり、一八世紀には輸入紡糸による織布工業が発生している。この両部門は長い間小商品生産及びマニファクチャの形が続けられたが、紡績は一番最後に発生し、最初から機械的工場生産として現われた。(官営アレクサンドロフ・マニユファクチャが一七九八年に開設し、最初馬力と水車を動力としてジュニー紡績機が用いられたが、すぐ蒸気機関を使用する)労働生産性は一八〇五年を一とすれば、一八一〇—二・三、一八二〇—七、一八三〇—一四、一八四一—二二)すでに一八一二年の祖国戦争までに莫斯科を中心として私的企業が機械を用いて紡績を営んでいたのであるが、莫斯科の大火により全滅し、一八三五年にいたつて事態はようやく一変した。特に一八四二年イギリスにおいて綿業機械輸出禁止令が廃止されてからはロシアの紡織業は大いに發展し、織布、捺染企業主が紡績工場を建設しはじめ、一八四五年にはじめて棉花の輸入を越え、五〇年

代には織布業者は主として国内産の紡糸を使用するようになった。

捺染工業においては一八二〇年代に機械が普及しはじめたのであるが、比較的長く手捺染が行なわれていた。しかし五〇年代末には機械が広く用いられるようになった。動力として馬力や水車が蒸気に代えられたのは一般に六〇年代に入つてからである。又、力織機は農奴解放前から現れているが、その普及はおそく、解放前には主として織布マニユファクチャにおける手織機と結びついて、分散形態が行なわれていた。一八五九年には機械織布はなお全産額の二割にすぎず、分散形態が一般に消滅したのは七〇年代に入つてからである。

工業の機械化の結果としてあらわれる生産過剰危機はロシアにおいてはまず木綿工業にあらわれた。一八六七年の危機の中心をなしたのは木綿工業であり、一八七三年においても形はより複雑であつたといえ、木綿工業は大きな打撃をうけた。又一八六一年の解放前に自由な賃労働に基く常傭労働者が形成されはじめている。彼等は主として農奴農民か

ら募集されたのであり、その農業との結びつきはきわめて弱く、或は全く離脱している者もあつた。しかし彼等は身分的にはなお農奴であり、その賃金の一部を年貢として地主に納めなければならなかつた。つまり資本家と地主から二重に搾取され、その意味ではなお「前プロレタリア」であり、プロレタリアに転化するのには農奴解放以後においてである。

2 製鉄業——製鉄業における技術革命とは鍛鉄炉および他のより完成された設備の普及、蒸気機関と水力タービンによる水車の廃止である。ウラルの官営カマ・ポトキン工場では一八三七年に右のような経過がなされている。しかし一八六一年前においては鍛鉄炉は半ばに達したのみであり、製鉄業が大発展をするのは六〇—七〇年代の鉄道建設期を必要とし、その後一八八二年には銑鉄炉は約一割に減少している。動力の変革はさらにおくられた。変革前には水車の利用は八八パーセントであり、一八八二年においても中央工業地帯において三七パーセント、ウラルでは半ば以上に達していた。製鉄業においては自由賃金労働者は割合に少く、解放前にはなお前ブ

ロレタリアであつた。

四〇年代からはじまる汽船の普及、六〇—七〇年代にはじまる鉄道建設にともない、鉄の需要は著しく増大したが、国内ではそれに応ずることが出来ず、鉄の輸入が激増した。それが改善されたのは八〇年代末、南方の鉄工業が発達してからである。一方機械の生産も河川汽船の製造をもつて確立され、一八七八年には国内汽船の三分の二を製造した。機関車、客車の製造はやや後れ、六〇—七〇年代の鉄道建設は輸入によつて行なわれ、国内の需要を充たしたのは七〇—八〇年代においてである。工作機械の製造はさらにおくられた。工作機械生産の未発達は十月革命までのロシア工業の特徴である。

以上のような観点からヤツンスキイは「ロシアは大工業において機械技術が手工業的技術を第二義的なものとしたのは一九世紀の八〇年代はじめにおいてである」(六二頁)とする。つまり技術革命は三〇年代の後半から八〇年代の初頭にかけて行われたのである。

では技術革命に対応する社会変革はどうであらうか。木綿工業においてのべた如く、ロ

シアにおいても本源的蓄積に特徴的な、強制による土地喪失は農奴解放前から農民の若干の部分に対して行なわれた。しかし一八世紀においてはその結果農奴を資本主義的労働者にしたのではなく、地主のマニユファクチャや農奴占有マニユファクチャの労働者にしたにすぎない。一八六一年以前においても資本主義的マニユファクチャにおいては自由な賃金労働者が使用されていたが、彼等はその地主に対してはなお不自由な農奴であり、賃金の一部を年貢として納めていた。農奴解放は大部分の農民の土地を縮小させたばかりでなく、多数の土地喪失者を生み、彼等を農村からほり出したのであるが、すでにその前には資本主義の原則にもとづいて仕事を求める可能性がひらかれていた。かくして農奴解放以後プロレタリア化した労働者が多数に存在した。一八八一年モスコの織維工の四二・八パーセントは労働者の子であり、その比率は紡績工で八二・一パーセント、製鉄工では二一パーセントを占めている。

又機械の使用は労働者の構成を変えると共に、賃金を低下せしめた。一八五〇年代末か

ら八〇年代初頭にかけてイヴァノヴォの織布工の賃金は二、三倍低下している。織布機械で働く織布工の賃金は一五パーセント増加しているが、ライ麦粉は一〇二パーセント高騰している。又捺染工の賃金は手捺染の行なわれていた一九世紀初頭に比べて捺染機械の支配的になつた一九世紀中葉には二分の一となりライ麦の価格は三倍以上高騰している。

(ガレーリン『イヴァノヴォ・ヴォズネセンスタ市』一八八五年) このような傾向はプロレタリア運動へと発展して行く。『七〇年代、特に八〇年代においてロシアのプロレタリアは目ざめ資本家に対する闘争を開始した』(党史八頁)のである。

一方産業ブルジョアジーの形成もいぢりしく進展した。しばしば、小企業の主人から出ている資本主義的マニユファクチャの持主は、工場の経営者となり、ブルジョアの第一線へ出て来た。産業革命は従来の買占業者や商人に代つて工場、鉄道経営者を第一位にし上げたのである。

以上の点からみてもヤツンスキイは産業革命を一九世紀三〇——八〇年代において

ことが知られる。つまり「封建—農奴制機構への過渡期の歴史的現象」(四八頁)としてとらえられた産業革命は、『封建的残滓の上に資本主義が勝利し、確立した八〇年代』(ドルジーニン)に完了したとされるのである。

最後にヤツンスキイはロシア産業革命の後進性の原因を一八六一年まで続いた農奴制と、その廃止後における封建的残滓の存続にもとめて次のように結んでいる。「農奴制地主は一八六一年まで、およびそれ以後においても社会のおくれた勢力であり、生産力の発展に應ずる生産関係の変化に対して阻止的なたらぎをなし、そのことによつて生産力発展のテンポとその水準の上昇を阻止したのである。」このことは、「国内市場の狭小さ、政治的・上部構造の反動的役割と相まつて、国民経済における工業の位置、及びブルジョアジーの社会的地位をイギリスや西ヨーロッパ諸国に比して著しく低くしているのである。」(七〇頁)

以上簡単に論旨を紹介したのであるが、ヤツンスキイ自身も認めている如く「大略の方

針」であり、なお未解決の問題を多く含んでいる。特に産業革命の推進力となるべき産業ブルジョアジーの発生と、その地主及び商人ブルジョアジーとの関係、いわゆる地主マニユファクチャや商人マニユファクチャに対する農民出身の自主的マニユファクチャの闘争を各産業部門別に研究することが残されている。イギリス、フランス、特にドイツとの対比においてこの点を説明することが、ロシア産業革命の特殊性、ひいてはロシア資本主義、更に、その社会主義革命の特殊性を理解する上からも極めて重要であると思われる。

— 国本哲男 —

新入会員(復活会員を含む)

猪谷文臣

岩田慶治

川瀬智寿子

小池洋一

国学院大学

多田伝三

約田正哉

東京都渋谷区若木町九

本郷広太郎

立教大学 東京都豊島区池袋三

図書館